

子どもの頃、夏休みになるとすぐ、父の郷里の伊豆に帰った。夏休みの間だけ滞在する私には、ひとりとして友達がいなかった。土地の子と遊ぶのを、なぜか祖母が嫌ったためだ。夏休みの始まる前から、海で泳ぐ土地の子の肌は、黒く日焼し、陽に照らされて輝いてまぶしかった。それにひきかえ、私の肌は、白く、また、一日の大半を家の中ですごしていたため、二週間たつても、一向に色に変化は現われなかった。

私は、よくひとり家の大きな門の前に立ち、通りすぎる人々を見ていた。

「蒼子ちゃん、いつ帰って来たの。いつまでいるの。おじいちゃん、おばあちゃん嬉しがってるでしょうね。」

私のことを知っている土地の人は、決まって同じことをたずねた。私は、いつも同じ答えをしては、きちんとおじぎをして、くるんと背を向け、家の方へと、歩いて行った。門から家の玄関までは、

ちょっと距離があつて、たいていの人は私が玄関にたどり着くまでに、姿を消していた。玄関の所で、門の方を見て、その人が行きすぎていたなら、私は、走って門の所にもどり、また次の人が声をかけてくれるまで待った。もし、まだその人が、私を見ている時は、しかたなく、玄関の戸を開けて、中まではいらなくてはならなかった。

一日に、何度もそれをくり返した。しかし、誰ひとりとして、『遊びにいらっしやい』とはいつてくれなかった。

「まっ黒に日焼した子が、二〜三人走って来た。私の前をすぎる時、ちょっと足を止め、みんなでコソコソ話をして、また勢いよく走って行った。夏休みが終わる頃、門の前で長時間立っていたためか顔と手は、土地の子と同じように黒くなった。でも、その夏も友達はできなかった。」

(蒼)

幼児の教育 第八十四巻 第八号

八月号 ①

定価三五〇円

昭和六十年七月二十五日 印刷

昭和六十年八月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします